

他の諸<ヒューマニズム>との比較論的考察にも、いくらかの基本的手がかりを与えうるのではないかと思う。

提題            ペトラルカとクザーヌスにおけるヒューマニズム

大 出        哲

Nicolaus Cusanus (1401—1464) は、1416年にハイデルベルク大学の学籍登録をしたが、1年足らずでパドヴァに赴く。そこで doctor decretorum の学位を取得したのち、1425年春にはケルン大学の学籍登録をする。当時、ローマ教皇庁は、古典文学の熱愛に燃えはじめていた。この火は燃えさかって、人文主義者 Tommaso Parentucelli と Enea Silvio Piccolomini を教皇位に挙げるに至る。こうした状況下でクザーヌスは、ケルンにおいて、イタリア人文主義者のために写本収集家として熱心に働き、ラテンの古典作家のおびただしい写本を発見して彼らに貢献した。にもかかわらず、クザーヌスは、パーセル公会議参加 (1432年2月29日) の頃から次第に彼らから忘れ去られてしまう。Pomponazzi, Ficino, Pico の著作には、クザーヌスの名は見当たらない。しかし、後世は彼を「ドイツ・ヒューマニズムの代表者」(E. Vansteenberghe), あるいは、「キリスト教的ヒューマニズムの当時の最大の代表者」(E. Bohnenstätt) と呼んでいる。ここから、「クザーヌスはイタリア人文主義者と袂を分かって異質なヒューマニズムを打ち立てたのだ」という命題が推測される。この命題を検証するために提題者は、「すべての人文主義者の真の原型」(M. Seidlmayer) と呼ばれている Francesco Petrarca (1304—1374) をイタリア人文主義の代表者として引き合いに出したい。というのは、彼とクザーヌスとの関わりの深さは、G. Santinello の文献学的業績によって確認されるからである。彼によれば、Bernkastel-Kues の聖ニコラウス養老院の図書室に所蔵されているペトラルカ写本—De vita solitaria (Codex Cusanus 53, fol. 172<sup>r</sup>—222<sup>r</sup>); De remediis utriusque fortunae (Cod. Cus. 198, fd. 1<sup>r</sup>—157<sup>v</sup>; Cod. Cus. 199, fol. 1<sup>r</sup>—170<sup>v</sup>); Rerum memorandarum libri (Cod. Cus. 200, fol. 1<sup>r</sup>—96<sup>v</sup>); De secreto

conflictu curarum suarum (Cod. Cus. 200, fol. 96<sup>r</sup>—141<sup>r</sup>) ; De otio religiosorum (Cod. Cus. 200, fol. 142<sup>r</sup>—178<sup>r</sup>) ; Sine nomine (Cod. Cus. 200, fol. 178<sup>r</sup>—207<sup>r</sup>) ; De sui ipsius et multorum ignorantia (Cod. Cus. 200, fol. 208<sup>r</sup>—241<sup>r</sup>)—には、クザーヌスの手による欄外タテ線、および、欄外注が見られるがゆえに、クザーヌスがこれらを極めて厳密に研究したことは明白である。提題者は、クザーヌスが注目している次の引用の ignorantia を取り上げ、無知に触発された両者の思想展開を吟味して、さきの命題の正当性を要求しようとするものである。

「もし人々の叫びではなくて事物の真理が吟味されるならば、彼ら（学問の名声の高い人々）は少しばかりの知識を、極めて多くの無知 ignorantia を所有していた、ということあなたは見出すであろう」De sui ipsius et multorum ignorantia (Cod. Cus. 200, fol. 238<sup>ra</sup>)。

ペトラルカのヴェントウ山登頂（1336年4月26日）は、「ラウラとの出会い」にもまさる意義を彼の精神史にする。Dyonisius de Burgo Sancti Sepulcri 宛の手紙によれば、ペトラルカは、「そのすばらしい高所をきわめようという欲望だけに誘われて登った」。頂上で彼は、アウグスティヌスの『告白』を開く。出て来たのは、「人々は、山の高み、海の巨大な波、河の洋々たる流れ、大洋のまわりの海岸線、星々の運行を賞賛しようと歩きまわると、自分自身をなおざりにしている」(X, 8, 15) という個所であった。彼は自らの無知を告白する。「本を閉じると、私自身に腹が立って来た。なぜなら、精神以外のものは何も賞賛に値しないこと、偉大な精神に匹敵するほど偉大なものは何もないこと、これらのことを私は、もうずっと以前に異教徒のあの哲学者たちから学ぶべきであったにもかかわらず、今もなお地上のものどもを賞賛しているからである」。

この時以来彼は、「自分の ego の新発見に憑かれてしまったように、もはや自分であることだけを欲し、自分を生かすことだけを欲する」(M. Seidlmayer)。このため彼は、孤独を求めてアヴィニョンからヴォークリューズに移る。この移転は、女性への愛の苦しみから逃れるためでもあった。すでに剃髪を受けた彼は、自らの乱れた生活を改めようと恩寵を求める。しかし、ラウラへの愛は回心を引きとめる。引きとめるラウラへの愛にさらに疑問を投げかける。ヴォークリューズのペトラルカにはもう一つの苦悩があった。彼は大スキピオ・アフリカヌスを英雄詩で

歌いあげる仕事と取り組んでいたが、世俗的な名声を求めるこの知的活動の価値と  
 靈魂の救いを求める神の観想という教会的伝統に基づく精神活動の価値とが葛藤する  
 のである。

ついにペトルカは、『秘密』において、「救いの思想」の代弁者としてアウグ  
 スティヌスを登場させ、彼との対話において愛と名声に関わる苦悩に決着をつけ  
 る。アウグスティヌスがラウラへの愛についてペトルカを責めたとき、彼は、現  
 世においては「人間への愛」が最高の価値をもち、これが究極的に「神への愛」に  
 つながる、と反論する。アウグスティヌスが『『アフリカ』を捨てよ』と迫ったと  
 き、ペトルカは拒否するが、「書物が死滅すれば、お前自身も消滅する」という  
 アウグスティヌスの問題提起には答えられない。この答は『名声の凱旋』以後に持  
 ち越される。

名声は死を克服する。名声は人々を墓から引き出して生命を吹き込み、凱旋の行  
 列の先頭に立つ。しかし、彼も、死期が迫ると、名声もついに時間に打ち負かされ  
 ることを悟る。しかし、ラウラへの愛だけは永遠に滅びない。ペトルカは、最後  
 の詩の末尾をラウラとの再会の喜びで飾る。

クザーヌスは、「ひとは、自分が無知であることを知れば知るほど、それだけい  
 っそう知あるものになるであろう。この目的のために私は、この知ある無知につい  
 て、いささか著作の労をとったのである」(Doct. ign. I, 1)と言う。彼もまた、無  
 知に触発されたのである。「知ある無知」とは、「われわれが真理を厳密には把握  
 しえないこと」このことを知ることである (Doct. ign. I, 2)。ところで、われわれ  
 が真理を厳密に把握しえないのは、「知性が<すでに知性のうちに縮限された仕  
 方で contracte 知性自体となっているもの>そのものだけしか知解しえないから  
 である」(Doct. ign. II, 6)。それゆえ、「知ある無知」は、「諸事物の知性におけ  
 る縮限 contractio」の解明を要求する。

神は「万物を数と重さと尺度とに従って創造した」(Doct. ign. II, 13)。しかる  
 に、「人間の精神は神の最高の似姿である」(Coni. I, 1)。それゆえ、「神の精神  
 から万物が生まれる仕方」と「人間の知性から数が生まれる仕方」との間には類似  
 が存するはずである。神を「絶対的な一性=1」とすれば、神の最高の類似である  
 人間の精神は「縮限された一性=10」である。したがって、「神から万物が創造さ

れる仕方」は1 + 2 + 3 + 4 という数の前進によって象徴され、「人間から諸事物が造り出される仕方」は10 + 20 + 30 + 40 という数の前進によって象徴される。「縮限された一性」は「人間的な神」*humanus Deus* (Coni. II, 14) とも言われる。

「人間的な神」は、10に縮限されている能力を展開できるにすぎない。すなわち、人間の知性は、10に縮限されているものだけしか知解できず、領域を越えて、1に縮限されているものを知解することはできない、つまり、神という絶対的な真理を厳密には把握しえない。このことを知ることが「知ある無知」の第一段階である。

しかし、「知ある無知」は、「われわれ人間の天賦がなすべき努力はすべて、矛盾するものどもが一致するあの単純性（神）へと自らを高めることでなければならぬ」(Doct. ign. 枢機卿ユリアヌス師への著者の手紙)と教える。だが、縮限された一性である人間は、絶対的な一性である神へと自らの力で上昇できない。それゆえ、「知ある無知」はこう続ける。「近寄りえないものにわれわれを近寄りせるものは、われわれの力ではなくて、神へと向けられた顔をわれわれに与え、それと共に、神を探し求める最高の希求をも合わせ与えたところの神の力である」(Doct. ign. II, 13)。恩寵の力によって、「人間的な神」は「絶対的な神」へと限りなく近づいて行く。

約言すれば、ペトルカカのヒューマニズムは、無知の自覚による個的精神の尊厳の発見と追究であり、その底流には、「伝統的な神の愛主導型の価値観」への「人間の愛主導型の価値観」の挑戦が見られる。これに対し、クザーヌスのヒューマニズムは、人間の形而上学的地位の高揚であり、「人間は人間的な神である」という命題に集約される。この命題は、たしかに斬新ではあったが、本質的には伝統的世界観の枠外に出るものではなかった。そこには、教会の束縛への挑戦をこめた個人の尊厳の強調は見られない。とすれば、両者のヒューマニズムは、かなり異質なものであると結論せざるをえない。

---